沈黙の15分 番外編～奇跡

あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
沈黙の１５分　番外編～奇跡

【Ｎコード】
Ｎ１６３３ＢＡ

【作者名】
あこ

【あらすじ】
１５時１５分、雪崩から奇跡的に生還を果たした江戸川コナンこと、工藤新一。
深夜、彼が搬送された病院を訪ねる１人の少女。
彼女が新一を見舞った理由とは・・・？
沈黙の１５分、エンディングからエピローグ間にあった出来事です。
尚、この小説はｍｉｘｉ、アメブロに掲載したものの再投稿です。

「トントン・・・・」

ドアがノックされる音で、オレの意識は現実に引き戻された。
ノックの後、オレの了解なしに開かれた扉。カーテン越しの為、誰が入ってきたかは確認出来なかった。

「大丈夫？工藤くん・・・・」
その声と共に、カーテンが開かれた。
「灰原・・・・」
顔を見ずとも、オレのことを「工藤くん」と呼ぶ相手は1人しかいない。
だから、迷わずこんな夜中にやって来たであろう人物の名前を呼んだ。
「新一、心配したぞ・・・・」
「博士・・・・」
2人で来たのは間違いないようだ。その証拠に、オレの本名である、工藤新一の名前で呼んでいる。
「哀くんがどうしても話がしたいと言っておってな・・・・」
「灰原が？」
そう博士に尋ね、隣に立つ灰原の顔を見る。
「ええ。それじゃ、博士・・・・」
「ああ、ここのロビーで待っておるからの」
そう言うと、博士はオレたちのもとを離れた。

暫く沈黙が流れる。それに耐えかねたオレは、灰原がここに来た理由を尋ねようと、口を開こうとした。
「あの、灰ば・・・・」

「ったく、あなたって人は・・・」
「へ？！」
発言を邪魔され、多少の不快感を覚えるオレ。
しかし、その不快感は、灰原の次の言葉でかき消された。
「あなたは無茶し過ぎなのよ！何でもひとりで背負い込みすぎるのよ！！」
「灰原・・・・・」
灰原の怒りの中に隠された心からの心配・・・。
それを感じ取ったからこそ、オレは何も言えなくなってしまった。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」

再び、沈黙が私たちを支配する。
その沈黙を破ったのは彼だった。
「悪かったな・・・。けど、何でもかんでも背負い込みすぎるのはオメェもだろ？」
そう言って、少し悪戯っ子のような顔を向けてきた。
「あなたには関係のないことよ」
私は少し不機嫌に返してみた。無意味だと分かっていながら・・・。
「関係なくねぇよ。オレをガキの姿にしたのはオメェだからな・・・」
「何よ、今更嫌み・・・」
「それに、姉さんのことは半分はオレのせいだ・・・」
そう語る彼の表情（かお）は、悔しさに満ちていた。
姉の最期を思い出しているのかもしれない。
私たちが初めて出会った時に遭遇したあの事件の時、彼の推理力ゆえ、思わず彼を責め立ててしまった。

「ごめんなさい・・・」
「オメェが謝ることじゃねぇよ」

気休めにもならない・・・そんなことは分かってる。
分かってるけど、オレはそれを伝えずにはいられなかった。
「そういや・・・お前、何のためにわざわざ来たんだ？」
今更だが、こんな夜中にやって来た理由を尋ねてみた。
「これ・・・」
そう言って灰原が取り出したのは、サッカーボールのストラップがついた赤い携帯電話。間違いなく、コナンの携帯だった。
「なんで、オメェが？」
「メールが着たのよ、あなたのお母さんからね・・・」
灰原から携帯を受け取ると、受信メールを開く。
様子からして、既に読まれているみたいだ。
「悪いとは思ったけど、読ませてもらったわ・・・」
「ったく、人のメール勝手に読むなよ〓」
悪態をつきつつも、母さんから着たというメールを読む。

タイトル　大丈夫？

本文
新ちゃん、大丈夫だった？
阿笠博士に聞いたわよ
あなたがある村を救うために雪崩に巻き込まれたって・・・。
でも、新ちゃんが無事でホントによかった。
蘭ちゃんや園子ちゃん、哀ちゃんたちにも迷惑かけて・・・、ホントにあなたって子は・・・。説教は、今度会った時、たっぷり食らわせてやるから、楽しみにしておきなさい♪
それじゃ、元気でね、新ちゃん♪

XXX　有希子

P．S．新ちゃんがいなくなったら、哀ちゃんが気持ちを打ち明け

られる人いなくなるんだからね！
間違っても、死んじゃダメよ！

「ったく、コナンの携帯に『新一』の名前をいれんなよな・・・・」
「ま、さすがあなたの母親ね（笑）」
「そこが母さんなんだけどな」
そうは言いつつも、オレのことを心配してくれるのは嬉しかった。
そして、改めて気付かされた。
灰原が本心から向かい合える相手がオレしかいないことに・・・・。
勿論、オレにとっても同じことだ。博士や服部、父さんや母さんなど、オレの正体を知るものは多い。
しかし、同じ経験をしたのは、灰原ただ1人である。
オレにとっても、灰原にとっても、お互いが、お互いの境遇を唯一理解出来る”仲間”である。
蘭が、死なせたくない大切なヤツなら、灰原は、死なせてはいけない大切な仲間だ。

かつて、彼らの友情によって助けられたことがある。
あの事件から数ヶ月経った今日、改めてそれを実感させられた。
あの時は、蘭に向けられた友情のカタチがオレたちを助けてくれた。
メール画面を閉じ、着信履歴を開く。

１５：１２　毛利蘭

そして、もうひとつの携帯の着信履歴を開く。

１５：１４　毛利蘭

あの雪崩から１５分が経とうとしていた時、蘭からかかってきた電

話だ。
雪の闇に閉ざされた中で届いた一条の光。
蘭の声で取り戻したわずかな意識を、光の先へと集中させた。
それから先のことはよく覚えていない。
みんなの安心した顔を見たオレは、再び意識を手放してしまったから・・・・。
オレは思う。今回オレが助けられたのは、全ての偶然が、必然へと変わって起きた、『奇跡』なんだと・・・・。

（後書き）

どーもあこです♪

『沈黙の15分』を見て以来、どうしても書きたかった話です。

“奇跡”は起こすからこそ“奇跡”なんだ・・・。

そんな言葉が頭を過り、その次には手が動いていました。
対象人物は、自然と哀ちゃんになりましたね（笑）
コナンと哀の、誰にも立ち入ることの出来ない関係というか、2人が背負ってる宿命みたいなものが、どうしても脳内展開されてしまい、結果としてこんな話になってしまいました。

ラストの有希子さんのメールはお遊びです（笑）
あと、コナンの携帯を哀が持ってたのは突っ込まないで（＾o＾；）
にしても、コナンの携帯ワンセグついてないのに、何でワンセグが見られるんでしょうね（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1633ba/

沈黙の15分 番外編～奇跡

2012年1月4日02時52分発行